

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	A-139	14-046
滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門		
題名 (原題/訳)		
Alcohol and the risk of Barrett's esophagus: a pooled analysis from the International BEACON Consortium. アルコールとバレット食道：国際 BEACON コンソーシアムのプール解析		
執筆者		
Thrift AP, Cook MB, Vaughan TL, Anderson LA, Murray LJ, Whiteman DC, Shaheen NJ, Corley DA.		
掲載誌		
Am J Gastroenterol. 2014 Oct;109(10):1586-94. doi: 10.1038/ajg.2014.206.		
キーワード		PMID
飲酒、バレット症候群、バレット食道、食道腺癌		25047401
要 旨		
目的： アルコール消費とバレット食道の発症リスクとの関連については明確に立証されていない。国際バレット食道腺癌コンソーシアムに参加した 5 つのケースコントロール研究に登録されている被験者のデータをプールして飲料別および合計のアルコール消費とバレット食道の発症リスクとの関連について検証した。		
方法： 対照群として被験者 1,282 名、GERD(胃食道逆流性疾患)を患う対照群として被験者 1,418 名、バレット食道患者 1,169 名を対象とした。多変数ロジステック回帰モデルを用いて年齢、性別、BMI、学歴、喫煙歴、GERD 罹患を調整して各研究のオッズ比と 95%信頼区間を推定した。ランダムエフェクトモデルによりリスク推定値を算出した。性別、BMI、GERD 罹患、喫煙による潜在的な修正効果についても検証した。		
結果： 対照群を基準として比較すると、アルコール消費とバレット食道発症との間に統計的に境界的な負の相関が認められた(飲酒対非飲酒でオッズ比 0.77, 95%信頼区間 0.60-1.00)が、アルコール量に応じてリスクが低下することはなかった(P trend=0.72)。アルコールの種類においてはワインがバレット食道発症リスクの減少と関連を認めた (飲酒対非飲酒でオッズ比 0.71, 95%信頼区間 0.52-0.98)が、アルコール消費量との関連は明確に立証することができなかった(P trend=0.21)。GERD を患う対照群と比較した際にはアルコール消費とバレット食道発症の間で関連は認められなかった。同様の関連が BMI、GERD 罹患、喫煙に対する層別解析でも認められた。		
結論： 食道腺癌に対する知見は先行研究と一致していたが、アルコール消費がバレット食道に対するリスクを上昇させるエビデンスを見つけることはできなかった。		